変容する自衛隊

戦火を遠ざける重しこそ

論説主幹 五十嵐裕

戦後79年の「空気」を感じたくて、せみ時雨の靖国神社を訪ねた。展示施設の遊就館に入る。

身を捨てて国に殉じた軍人たちをたたえる壮大な「絵巻」だ。戦争で命をなげうった英霊たちに、感謝と畏敬の念を―。

兵士や内外の民を死に追いやった軍官僚らの責任は語られない。満州事変を引き起こした関東軍の暴走も批判されていない。

館内は若い世代も目立つ。熱心に読むパネルの説明から何を感じ、受け取っているだろう。

靖国には戦後生まれの自衛官もやってくる。1月には陸上幕僚副長らが集団で参拝した。昨年5月には海自練習艦隊司令部の司令官らが制服で集団参拝している。

防衛事務次官の通達は、宗教の礼拝所への部隊参拝や参加の強制を禁じている。今回、陸自は公用車の利用が問題とされただけ。海自は「自由意思による私的な参拝」と問題にもしない。

通達を無力化するかのように、自衛官は参拝を繰り返す。

危うい接近と偏り

集団的自衛権の行使容認が閣議決定されて10年―。政府は自衛隊が米軍と一体的に行動できる環境の構築を急ぐ。共同作戦では敵基地攻撃能力の発動も排除せず、物的、技術的、財政的、組織的な準備を進める。念頭には2027年にも起こるとの指摘が出ている「台湾有事」がある。

必然、部隊の演習や隊員の訓練はより実戦的になる。難度が高く、危険も増すだろう。4月に海自ヘリ2機が衝突し、8人が亡くなった事故などにそうした背景を見て取る防衛省OBもいる。

近づく戦場を肌で感じる隊員らを精神面で支える「装置」として靖国を組織的に利用しているのなら、戦前の軍部と変わらない。やがては戦争を肯定する危うい意識まで組織の内側に育まないか…。そんな懸念が拭えない。

4月、靖国神社の宮司に元海将の大物OBが就いた。「個人の自由意思」の外形を保ちつつ、両者は確実に接近している。

思想的に偏った隊員教育も懸念されている。学外の人物が教室で政治的に偏向した講演を学生に行っていると、昨年、防衛大の現役教授が実名で批判した。「商業右翼」を講師として招く悪習が幹部学校にまではびこっている、と。

政治的な中立は、民主主義国を守る実力組織が存立する大前提だ。それすら浸食されているのなら、あまりにも危険だ。

文民統制の現在

70年前の防衛庁発足時から、自衛官(制服組)より官僚(背広組)が優位に立つ「文官統制」が続いてきた。参拝を巡る通達も、靖国に自衛隊を近づけたくない背広組の意思が読み取れる。

シビリアンコントロール(文民統制)が目的のこの仕組みの解消こそ、制服組の宿願だった。日米「軍事同盟」拡大に伴って政治家と制服組は結びつきを深め、ついに15年に全廃された。

政治が軍事を制御する文民統制は今、機能しているか。海自の手当不正受給問題は防衛相に8カ月も報告されず、公表前の説明もわずか「数秒」。逮捕は資料の注釈に記されただけで、大臣はその認識がないまま発表していた。

軍部の政治介入と独断専行が戦火を無責任に広げた歴史から現在を案ずる。政治家は再び、軍事的合理性を御旗とする制服組の主張を唯々諾々と受け入れ、あるいは依存しているのではないか。

きのう総裁選不出馬を明らかにした岸田文雄首相は7日、憲法への自衛隊明記に意欲を示していた。欲しいのは「自衛」の二文字だろう。イスラエルの蛮行を見るまでもなく、何事も正当化できる魔法の呪文だからだ。

平和憲法と文民統制は武力の保持や使用について抑制的に働いてきた。自衛隊を戦火から遠ざける重しだ。失っていいのか。国民一人一人が真剣に考える時だ。